

高校生と乳幼児及びその親とのふれあい体験について － 高校生の振り返りから －

廿 麻乃

(宇部フロンティア大学短期大学部保育学科)

Observations of experience in relating to infants and their mother

－ Reflections of high school students －

Asano Hatachi

(Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

近年、子どもに関して様々な社会問題がおきている。その中の一つに少子化がある。「Roots of Empathy」が日本で紹介されて以降、少子化対策として児童生徒と乳幼児とのふれあい体験事業が実施されてきた。乳幼児とふれあうことによって、児童生徒への乳幼児への関心の高まりや子育てへの肯定的感情、共感性の高まりなどが期待できるとされている。

今回、高校保育科1年生と乳幼児及びその親とのふれあい体験を実施し、参加した高校生への事後アンケートを元に、ふれあい体験によって何が得られるのか検討した。その結果、暖かい気持ちを感じたことや乳幼児について学びたい気持ちが強くなったことが報告された。ただ、1回のみ短時間のふれあいだったため、うまくふれあうことができなかったという声も多かった。事前事後の学習の充実や複数回のふれあい体験の実施が課題である。

キーワード：乳幼児，高校生，子育て，ふれあい，感情

1. 目的

1-1. はじめに

子どもにかかわるさまざまなことが、社会的な問題となっている。

一つに、少子化の問題がある。厚生労働省が公表する2016年の人口動態統計年間推計¹⁾の出生数は、100万人を切った。少子化は進んでいる。そのように、子どもの数は少なくなっているが、2016年7月に発表された児童相談所の平成27年度児童虐待相談数は103,260件であり、年々増加している。

また、子育てをしていて負担・不安に思うことがあると回答する親は、72.4% (厚生労働省, 2015)²⁾ という調査結果がある。子育てが難しいという親が多く存在していることがうかがえる。その要因として、乳幼児とかかわる体験がないままに親となり、かわり

方がわからず子育てに困難を抱えたり、3歳までは母親の手で育てなければならないといった「三歳児神話」が出回っていたり、核家族化や近所づきあいの減少などで何かあってもすぐに相談する相手がいなかったり、スマホやインターネットの普及によって知りたい事をすぐに調べられるようになったものの、どれを信じたらよいかわからなくなるほど様々な情報があふれていたり、などということがあげられる。「三歳児神話」については、乳幼児期は、その後の発達の土台を形成する時期であるため、どのような環境で育つかはとても重要ではある。しかし、必ず母親の手で育てなければいけない、ということはなく、安定した関係の中でも育つことが重要である。母親以外との関係の中でも健全に発達することは様々な研究の中で示されている(NICHHD, 2013)³⁾。科学的に示されているにもかかわらず、一般的にはなかなか消えない話題である。この

ように、近年の日本において、子育てを難しくする要因は数えきれないほどある。

母親の育児不安が大きくなりすぎると、親子関係の不安定につながることもある。子の親との関係がうまくいかないと、子どもが大きくなってから子ども同士のかかわりにも問題が生じていくこととなる。その結果、いじめや学校不適応や反社会的行動などが児童期・青年期に問題となっていく可能性がある。

武田 (2003)⁴⁾ は、この事態を打開するために、乳幼児と接する機会を意識的に増やしていくこと、乳幼児との関わりの体験を持たせ、乳幼児の心身の発達に関する教育や子育ての知識を与える教育を行っていくことが今後大変重要になってくると述べている。

国としては、厚生労働省によって2002年度に次世代育成対策推進法、その後2004年度の子ども子育て応援プランの中に「乳幼児と年長児童の交流事業」が位置づけられた。この事業のねらいは、「将来の親となる世代が、子どもや家庭を知り、子どもとともに育つ機会をつくることにより、人への関心や共感を高めることである」とされた。2009年度までに保育所や児童館・保健センター等においてすべての施設での受け入れを推進し、10年後には、子育てに肯定的なイメージをもてるような社会を実現していくことが目標と掲げられていた。厚生労働省のモデル事業として行われた実践事例 (2005)⁵⁾ は、児童館などによる開催である。事前事後学習を含めて5回ほど、直接のふれあい体験は2回ほどの事業となっている。事業の成果は、参加した児童生徒から命の大切さや子育ての大変さの実感や自分の育ちのふりかえりといった感想が寄せられたことがあげられている。その後も、内閣府において少子化対策施策として、継続的に活動が実施されている。

教育現場でも、ふれあい体験は実施されている。2008年告示の中学校家庭科学習指導要領において、「家族と家庭に関する教育を一層充実」する視点がもりこまれ、「幼児と触れ合うなどの活動」を必修にすることが示されている。中高生と幼児が触れ合うことで、中高生に子どものことを理解しかわいいと思う気持ちが芽生え、やがて親になるときに役に立つことが期待されている (倉持ら, 2009)⁶⁾。

乳幼児との交流によって、共感を高めることができるといった考えは、メアリー・ゴードンによって創始され、カナダのトロント市で実施されているROE (Roots of Empathy) 「共感教育」が広く知られたことにあると考えられる。ROEは、乳児とその親と生徒

が直接触れ合いながら学校教育の中で行われる1年間のプログラムである。乳児の成長と親子の愛着形成過程に直接触れながら学び、人間発達への理解、他者への共感性や思いやり、自尊感情、命への慈しみ、将来に健康的な親や大人となるための養育性を育てていくことができるかとされている。櫃田 (2005)⁷⁾ によって、日本の公立小学校での実践がなされている。その結果、担任による生徒の行動変化の報告として、攻撃性の低下・仲間意識の高まり・共感性の高まりなどの報告がされている。生徒自身の意識としては、自己肯定感が高まるという変化がみられた。これらのことにより、ROEの教育的効果は期待できるものと考えられる。しかし、ROEは認可制のため、汎用することができない。また、日本の公立学校において年間を通じた多数の授業回数を確保することの難しさやグループのファシリテーターとなる存在の育成などが課題として指摘されている。

実際に、国の施策や家庭科学習で行われている体験は、保育所や幼稚園に一度訪問し、何時間かふれあうものが多い。武田 (2003)⁸⁾ は、一、二回のふれあいだけで共感性の高まりを期待できるものではないとしている。しかしながら、意味のないものでもなく、暖かい気持ちや優しい気持ちを感じることや親の責任などを感じることに親の想いに気づくことにふれあい体験の意義があると述べている。寺田 (2005)⁹⁾ は、ふれあい体験の事後アンケートから中高生の気づきを、赤ちゃんのかわいさと子育ての大変さに気付いたこと、赤ちゃんへの興味関心が増したこと、自らの育ちを振り返るきっかけとなったこととしており、武田の指摘した気持ちや親の想いへの気づきが得られていることがわかる。

今回実施した乳幼児とのふれあい体験は、高校1年生と乳幼児とその親との一回のみの体験であった。一回だけの体験で、どれだけ得るものがあるだろうか。短い時間の中で、高校生生徒が何を得たのか、振り返りのアンケートを元に、ふれあい体験の意義について考えていきたい。

1-2. 目的

乳幼児とふれあうことでどのような体験をすることができるのか、高校生に行った振り返りの事後アンケートより考える。

2. 方法

2-1. 乳幼児と高校生のふれあい体験の実施

2-1-1. **主催** A県において子育て支援の研修を受けて発足した団体が主催した。

2-1-2. **実施時期** 2014年12月に実施した。

2-1-3. **参加者** A高等学校保育科の1年生39名が体験を行った。乳幼児親子は、一般公募し、3か月から3歳までの17組37名が参加した（きょうだい含む）。

2-1-4. **内容** 乳幼児とその親1～2組に対して、生徒4～5名ずつのグループとなり、1時限（50分）のグループごとの交流が行われた。各グループには、子育て支援活動の経験があり、事前研修を受けたスタッフが1名ずつ入り、交流が適切に行われるようサポートを行った。グループ毎に自己紹介したのち、生徒が作成し持参したおもちゃを仲介して、生徒と乳幼児が交流したり、親が日頃の様子を話したりした。

2-1-5. **事前準備** 生徒は、事前に授業の中で乳幼児の発達やかかわり方について学んでいた。また、乳幼児との交流の際に使う遊び道具を事前に作成し、持参した。

2-1-6. **事後学習** 交流後、生徒へ振り返りを兼ねてアンケートを実施した。さらに、乳幼児親子にクリスマスカードを作成し、主催者から郵送した。

2-2. 高校生へのアンケート内容

(1) 今回のふれあい体験以前に乳幼児とのふれあった経験の有無

(2) 自分の思うとおりに乳幼児と接することができたか

(3) ふれあい体験をどう感じたか。12個の感情を示し、感じたものすべてに丸をつけるようにした。また、それに丸をつけた理由についての自由記述。12個の感情は、小学校国語教科書¹⁰⁾及び森田(2003)¹¹⁾を参照して抽出した。

(4) 感想・意見（自由記述）

以上の内容について高校生に事後にアンケートを実施した。

3. 結果

3-1. 高校生の乳幼児と接した経験

これまでの生活の中で乳幼児と接する経験があったかどうか質問した。接した経験があると回答したのは、15人であった。家族（2人）や親戚（5人）、近所づきあい（6人）、習い事（2人）の中で、ふれあっていた。接した経験はないと回答したのは、24人であった。

3-2. 自分の思うとおりに乳幼児と接することができたか

ふれあい体験の中で、自分の思うとおりに乳幼児と接することができたかどうか質問をした。思うとおりに接することができたと回答したのは、17人であった。その理由は、「抱っこした時、上手にできたから」などと抱っこをしたことや、乳幼児が「笑ってくれるように接した」と笑顔になったこと、「自分の作った

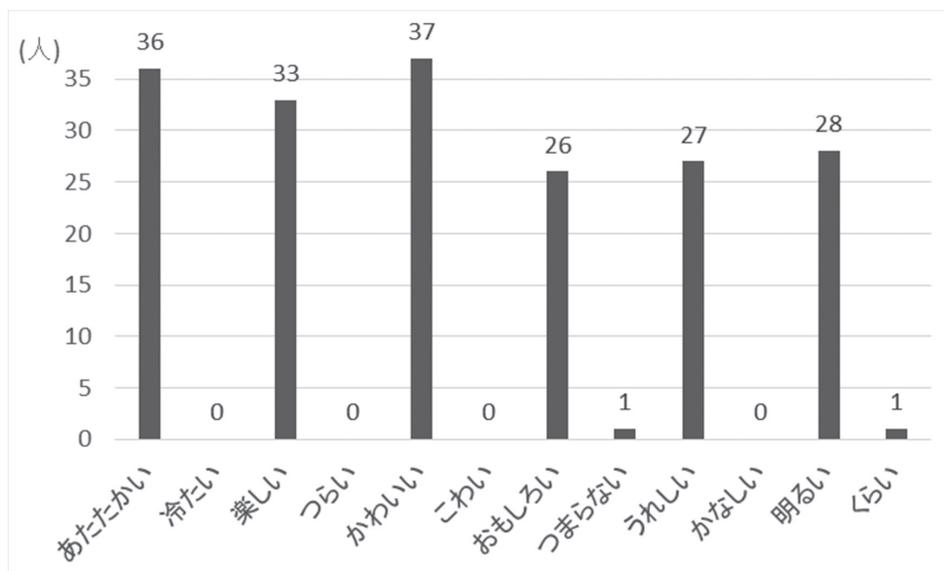


図1 ふれあい体験をどう感じたか（複数回答）

おもちゃで楽しく遊んでくれた」と一緒に遊ぶことができたことであった。思うとおりに接することができなかったと回答したのは、22人であった。その理由は、乳幼児が「すごく人見知りであまりなついてくれなかった」など人見知りのために泣いたり、機嫌が悪かったりして、近づくことが難しかったことがあげられた。ほかに、働きかけたが、乳幼児が泣いてしまったといったような「抱っこをしたときに赤ちゃんが泣いてしまったから」「自分が話しかけたら泣く」という理由があった。さらに、「リードできなかつたから」「あまり積極的にいけなかつた」といった自身の消極性について言及する記述もあった。

3-3. ふれあい体験をどう感じたか

ふれあい体験を行った後、どのように感じたのかを12個の選択肢から複数回答した(図1)。かわいい(37人)、あたたかい(36人)、楽しい(33人)、明るい(28人)、うれしい(27人)、おもしろい(26人)という肯定的な感情を2/3以上の生徒が選択した。つまらない、くらいという否定的な感情を選択した生徒は、一人ずつであった。冷たい、つらい、こわい、かなしいを選択した生徒はいなかった。否定的な感情を選択した生徒は、肯定的な感情も選択していた。

また、選択した理由を自由記述で回答した(表1)。自由記述の内容について、否定的な感情を選択した生徒と肯定的な感情のみ選択した生徒に分け、それぞれの記述内容について検討した。肯定的な感情を選択した理由は、その内容から三つに分類した。一つ目は、「みてるだけで、みんなが笑顔になれる」や「乳幼児のすることや笑顔がとってもかわいくて」といった乳幼児の存在そのものを肯定的に感じたということであった(乳幼児の存在)。二つ目は、「ばあっ!とかをしてその子が笑ってくれた」「自分たちが作ったおもちゃで楽しそうに遊んでくれ」などという記述がみられ、生徒のことがげや働きかけに対して乳幼児が応えてくれたということであった(乳幼児の応答)。三つ目は、「親子関係をみてとても暖かい気持ちになった」「お母さんの顔が本当にやさしい顔をしていて」といったように母親と子どもの暖かいかわりをみたことによって、肯定的な感情を感じたということであった(母親のかわり)。

否定的な感情を選択した理由には、乳幼児が人見知りをして、生徒とかかわることが難しかったことがあげられた。「乳児がきんちょうしちよって、お母さん、

表1 ふれあい体験を通して、何を感じたか(自由記述)

		自由記述(抜粋)	
否定的な感情を選択		乳児がきんちょうしちよって、お母さん、お母さんだからあまりふれあえなかつた。	
		最初ひとつもはなしてくれなくて少しくらいなつて思ったけど一緒におるうちにはなしてくれたりわらってくれたりした。うれしかった。	
乳幼児の存在		赤ちゃんをみて、すごくかわいいなと思ったし、暖かい気持ちになりました。	
		乳幼児は思ってもみなかつたことをしたり、すごくかわいい笑顔で笑ってくれるので暖かい気持ちやうれしい気持ちになりました。	
		5ヶ月の子だったから遊んだりはしなかつたけど見るだけで楽しかったしおもしろかつたから。	
肯定的な感情を選択	乳幼児の応答	赤ちゃんをみてるだけで、みんなが笑顔になれるし、ほっこりした気持ちになって、すごく楽しかつた。	
		自分達が作ったおもちゃで楽しそうに遊んでくれて嬉しかったし、お母さんの話も聞けたので楽しかつた。	
	かわいいだけじゃなくて、おもちゃで上手に遊んでくれるとこっちも楽しい気持ちになれたし、想像とはちがう遊びをしておもしろかつたです。		
	あくしゅしたときに手がすごくあつたかかつた。目をすごく見てきてクリクリでかわいかつた。おもちゃを渡したときに気に入ってくれてうれしかった。		
	私がばあっ!とかをして、その子が笑ってくれたり、すごくうれしくたのしかつたです。		
母親のかわり	ふれあっているときのお母さんの顔が本当に優しい顔をしていて、自分の子どもがすごくかわいいんだな。大切なんだなと思った。自分もお母さん達のように暖かく接したいです。		
	どの子どもとても可愛くてお母さんたちもすごく明るい人だつたし、親子関係をみてとても暖かい気持ちになつた。		
		お母さんが子どもに話しかけるとき明るく楽しそうに話しかけていて暖かい気持ちになつたから。	
		おこることなく、つねに笑顔で接していたことと、常に子どもの幸せを思っているような空気があふれていた。	

表2 乳幼児と接した経験の有無と当日のふれあい体験の自己評価について

		自分の思うとおりに接することが		合計
		できた	できなかつた	
乳幼児と接した経験がある	ある	7	8	15
	ない	9	15	24
合計		16	23	39

(人)

お母さんだからあまりふれあえなかった」や「最初ひとつとはなしてくれなくて少しくらいなつて思ったけど一緒におもうちにはなしてくれたりわらってくれたりした。うれしかった。」といった記述であった。

表3 ふれあい体験の感想・意見（自由記述）

	自由記述（抜粋）
楽しかった	<p>すごくてのしかったです。でもあんまりなつてくれなかったです。でもすごくかわいかったです。</p> <p>たのしかったです。かわいかったです。</p> <p>また今日みたいなのができたらいいなと感じます。</p>
うれしかった	<p>まだ生後3ヶ月にならない赤ちゃんを抱っこするのは最初不安だったけど、弟や近所の子のお世話をしていた時のように抱っこできて、「上手だね」と言われた時はすごくうれしかったです!!2歳の子はじらくっててどう接したらいいかとまどったけど、いやがって抱っこをすこしでも受け入れてくれすごく嬉しかったです!!</p> <p>日頃、あかちゃんにふれあうきかいがなかったので、今日ふれあえてうれしかったです。最初は全然わらってくれなかったけど、最後のほうになると笑ってくれてうれしかったです。</p> <p>おもちゃよこんでもらえたのでよかったです。赤ちゃんに触れることができたのでよかったです。また、このようなきかいができたらいいなと思います。</p> <p>人見知りがなく、最初からひざに乗ってきたり、作ったおもちゃで楽しそうにあそんでくれたり、本当に楽しかったです。子どもはやっぱり可愛いし、もっと保育士になりたいと強く思うようになりました。</p>
発見・学び	<p>どんな子たちが来るのか、すごくドキドキで、お母さんもとても優しく質問したらていねいに教えてくださり、また、5ヶ月のまだおすわりのできない子とこうしてふれあったりあやしたりすることができて、すごくい経験になりました。また、何度もこうしているんな子ども達とふれあいたいと思いました。</p> <p>短い時間だったけど、小さな子やお母さんと一緒に時間を過ごして、いろんな発見があり、とてもいい経験になりました。</p> <p>実際に小さい子と触れ合えていろんなことを学びました。</p>
乳幼児を感じた	<p>子ども達は泣いたり笑ったりいろいろな表情を見せてくれて色々勉強になりました。これからは色々な子どもとふれあいたいです。</p> <p>子どもとふれあってみて子どもの個性がとても強いと思いました。人見知りでぐずっていたのでどう接していいかわかりませんでした。0歳の子は大人しくて抱っこしているとよく動いたりしててとにかく可愛くて楽しかったです。またしたいです!!</p> <p>いろいろな人にどんどんいける子や人見知りの激しい子などいろいろな赤ちゃんがいました。泣いたり、笑ったりを繰り返す赤ちゃんを見て、感情豊かなんだなと改めて思いました。とても楽しくふれあい体験をさせていただきました。</p>
親との会話	<p>最初は少しすねているふれあえなかったけど、だんだん一緒に遊んでくれるようになってとても楽しかったです。お母さんに直接意見がきけて、これからは生かしたいと思いました。</p> <p>お母さんのいろんな意見など聞けてとても参考になった。まだ3ヶ月だから立つことはできないけど、寝返りやすわりができていて、歯がまだできていなかったから、シリコンみたいなおもちゃでかむ力をつけていた。</p> <p>5ヶ月の子とふれあってとても良い経験ができました。来年の1月2月3月頃にいとこが生まれるので、ふれあい方などがまた1から学べたし、お母さんもすごく良い人なんでもていねいに答えてくれて、とてもせっしやすきんちょうもせずにごせました。生まれる前の話や生まれた後の話もきけてたくさん学び良い時間でした。</p>
親の力	<p>おむつをかえるのをみたけどいやがることなくできたので母ってすごいなって思いました。</p>
子どもの未来	<p>子どもの体力の底の無さが見えて、自分も年々おとろえていってるんだと改めて実感しました。まだまだいろいろな道がある子ども達に明るい未来と希望があることを心より祈ります。</p>

3-4. 乳幼児と接した経験の有無と当日のふれあい体験の自己評価について

3-1. 高校生の乳幼児と接した経験と 3-2. 自分の思うとおりに乳幼児と接することができたかについて、クロス集計を行った（表2）。これまでに乳幼児と接した経験があると答えた生徒は、15人で、その中でもふれあい体験の中で自分の思う通りに乳幼児と接することができたと答えたのは7人、できなかったと答えたのは8人であった。乳幼児と接した経験がないと答えた生徒は、24人で、その中で、自分の思うとおりに接することができたと答えたのは9人、できなかったのは15人であった。乳幼児と接した経験がない生徒は、ふれあい体験で乳幼児と思うとおりに接することができなかったと答えた生徒のほうができたと答えた生徒よりも2倍ほど多くなった。

3-5. 自由記述の振り返りについて

感想及び意見についての自由記述であった。その内容によって、分類を行った（表3）。

まずは、「楽しかった」という感想があった。次に、自分の関わりによって笑顔になるといった反応をしたり、自分の作ったおもちゃで楽しく遊んだりする乳幼児をみて「うれしかった」ということがあげられた。さらに、具体的な事例はあげられていないが、ふれあうことで「発見・学び」があったと振り返った。また、「乳幼児を感じた」というような、乳幼児それぞれに個性があることや様々な表情を見たことが印象的であった、と述べていた。

乳幼児の親から子育てにまつわる話について聞いたなどの「親との会話」が心に残ったことも述べられた。オムツ替えを見てすごい、と「親の力」を感じたという記述もあった。

他に、乳幼児の成長を願うというものがあつた。

4. 考察

4-1. 乳幼児と接した経験の有無による違い

乳幼児と接した経験がない生徒は、自分の思うとおりにかかわることができなかったと答えた人が多かった。乳幼児とかかわったことがないということが、実際にかかわる際のとまどいにつながったと考えられる。参加生徒は、事前学習において、乳幼児の成長発達についての知識などを高校の授業の中で学んでいた。しかし、知識だけでは、実際の一人ひとり違う乳幼児を

前にかかわることは難しい、ということが示されたのではないだろうか。

乳幼児と接した経験があると回答した生徒も、約半数は思うとおりにかかわることができなかったと答えている。その理由の一つとして「自分の思うとおりに」ということが、生徒それぞれによって違うことが考えられる。家族に乳幼児がいる生徒は、普段の生活の中でかかわっているのだから、家族と同じようにふれあうことをイメージするだろう。しかし、乳幼児と接した経験がなければ、1回触れた、ということでも一つの経験として記憶に残るものになるかもしれない。個人による認識の違いが、結果を左右したと考えられる。

思うとおりに接することができなかった理由として、乳幼児の人見知りをあげる生徒がいた。人見知りは、養育者との愛着が形成されていることを示す行動である。親と子のこれまでの関係作りができていることを示すものでもあるため、その関係をみることも、乳幼児への理解を促すものであると考える。ただ、乳幼児と接したいができないということは、ふれあい体験の時間を無意味なものだったと感じてしまう要因にもなりかねない。事前事後学習で乳幼児についての知識を学ぶことやグループのスタッフのグループ内の緊張を取り除くようなかわり、母親からその子どもの特性やこれまでの成長過程などを聴くことなどによって、うまく接することができない乳幼児とのふれあいも意味のあるものとして高校生の中に残るのではないだろうか。

4-2. 乳幼児と接して感じたこと

武田 (2003)¹²⁾ は、暖かい気持ちや優しい気持ちを感じることを乳幼児と中高生のふれあい体験の一つの意義として挙げていた。今回実施したふれあい体験においても、生徒の事後アンケートの中から、暖かい気持ちや優しい気持ちを感じたことを読み取ることができた。多くの生徒は、人見知りをしたり、泣いてしまったり、という行動も含めて乳幼児とふれあった体験を暖かいものとして捉えていた。

乳幼児そのものではなく、暖かい親子の関係を見ることによって、暖かさを感じたといった記述も見られた。乳児期は、養育者と子どもの安定した関係が子どもの発達に欠かせないものである。その関係を直接みることによって、養育者からの暖かい眼差しや関わりが、乳幼児の成長発達につながるという理解をふれあい体験を通してできるようになるのではないかと考え

る。だが、親でもいつでも暖かく優しい気持ちでいられるわけではない。イライラしてしまい、激しい感情をぶつけてしまうときもある。ふれあい体験では、生徒たちとの接するその時間であるので、良い面を見せようという意識が親たちに働いていただろう。子育ての優しい暖かい部分のみしか知ることができないと、生徒自身が子育てをする時に、常に温かい親でいなければならないという意識につながってしまうことも危惧される。親が辛い時に、どうやって乗り越えていくのか、などの話もできると良いのではないかと。

4-3. 感想・意見について

乳幼児とふれあったことによって「うれしい」という気持ちを持った生徒がいた。生徒が働きかけることによって、乳幼児は素直に反応を示すため、笑顔になったり遊びに夢中になったりする。自身の働きかけが、乳幼児に喜んでもらえた、という実感を持つことによってこのような感想が出てきたのだろう。「うれしい」という感情は、もっと関わってみようという積極性につながっていくことが考えられる。また、「うれしい」ということは、自分にも何かできることがある、と感じられたからであると考えられる。「うれしい」という経験を積み重ねることは、自己効力感を高めることの一助となるであろう。

また、「乳幼児を感じた」という感想からは、教科書で読んで理解しただけではわからない、乳幼児が短時間に表情を様々に変える様子や身体の重みなどを感じたことがわかった。直接ふれあうことによってしか得られない感触を得たことがわかる。

さらに、「親との会話」についても記述があった。武田 (2003)¹³⁾ が指摘していた自分の親の想いにまでは、つながらなかったようだが、ふれあった親がどのように子育てをしているのか聞くことによって、親の想いにふれることができた。

以上のことから、乳幼児とのふれあい体験は、生徒にとって乳幼児や乳幼児と関わることについての理解や暖かい感情を感じた、自己の学びへとつながったという体験になったことが示された。

5. 課題

今回参加した生徒は、保育科に所属していた。始めから乳幼児に興味があり、乳幼児が好きだという思いを持っていた。そこで、ふれあいたい・学びたいとい

う気持ちが強い生徒が多かったため、肯定的なふりかえりが得られたことが考えられる。他の場所で実施する場合、乳幼児に苦手意識を持っている生徒がいることも考えられる。苦手だと感じていると、人見知りや泣く乳幼児を見て、さらに苦手意識が増していくことも考えられる。どのような体験プログラムを実施していくのか精査していく必要がある。

また今回のふれあい体験は、単発・短時間での実施だった。人見知りが強い時期の乳幼児は、短時間の中で初めての場所、初めて会うたくさんの人と慣れ、かかわることは難しかった。その結果、乳幼児とのかかわりに慣れていない生徒は、特にかかわることが難しくなった。自分のかかわりによって、乳幼児が泣いてしまうなどの経験をするによって、乳幼児への苦手意識につながることも考えられる。乳幼児が泣くことや人見知りは発達過程の一つであるため、生徒に対して事前事後学習での乳幼児への理解を図ることが必要である。また、1回だけの体験ではなく、複数回行うことによって、乳幼児の人見知りも和らぐことが予想される。生徒も、乳幼児へのかかわり方を理解しかかわることができるようになるであろう。さらに、継続したかかわりによって、乳幼児の成長発達や乳幼児とその親との関係性の変化がみられるだろう。そこで、より乳幼児理解や子育てについての理解が深まるだろう。以上のように、複数回のふれあい体験を行うことが望ましいと考えられる。しかし、学校の授業の中で行うことは、定められているカリキュラムとの兼ね合いがある。ふれあい体験のためにたくさんの時間を使うことは難しいことが課題である。

6. 謝辞

高校生と乳幼児のふれあい体験事業に参加くださった高校の皆様、乳幼児とその保護者様、実行委員として参加してくださった皆様に感謝いたします。また、主催団体のUSOMの皆様にお礼申し上げます。

7. 参考文献

- 1) 厚生労働省：人口動態統計の年間推計，2016.
- 2) 厚生労働省：人口減少社会に関する意識調査．2015.
- 3) 日本子ども学会：保育の質と子どもの発達 アメリカ国立小児保健・人間発達研究所の長期追跡研究から，赤ちゃんとママ社．2013.
- 4) 武田信子：厚生労働省「年長児童の赤ちゃん 出会い・ふれあい・交流事業」の意義と課題，武蔵大学人文学会雑誌，35（3），21-32，2003.
- 5) 厚生労働省：乳幼児と年長児童の交流事業事例．2005.
- 6) 倉持清美・伊藤葉子・岡野雅子・金田利子：保育現場における中・高生のふれ合い体験活動の実施状況と受け止めかた．日本家政学会誌，60（9）．817-823．2009.
- 7) 櫃田紋子：養育性の育成に関する研究－幼児期から始める「共感教育」－．総合福祉，2．117-123．2005.
- 8) 4) に同じ
- 9) 寺田清美：赤ちゃんと小中高生とのふれあい交流事業（授業）の重要性－スタッフとして現場からの声－．東京成徳大学紀要，38．45-56．2005.
- 10) 宮地裕 他 41 名：国語三上わかば．光村図書，128-129．2011.
- 11) 森田ゆり：気持ちの本．童話館出版．2003.
- 12)・13) 4) に同じ

